

旅先では誰でも特殊なもの未知なものを 期待するそうです

林崎志保 函館校国際地域学科地域協働専攻1年

「今はもう日本人と同じなんでしょう？」¹ 著者である瀧口さんはアイヌの母と和人の父の間に生まれ、北海道の観光地、阿寒湖の両親が営んでいた土産屋で育つ。「阿寒湖？行ったことがあるよ。あそこ、あやしげなアイヌの村がない？」「あなたはアイヌ人なの？」「アイヌの人たちって、今は日本人と変わらない、普通の暮らしをしているんだよね？」「日本語が上手ね」「もう純粋なアイヌはいないんだよね？」小さい頃からお店に出ている瀧口さんは観光客にとって民族衣装を着た自分が見せ物になっていると感じ複雑な思いを抱えながら生活していた。東京の大学を卒業して編集者として生活する中でも自分の存在に疑問を持っていた。本書は編集者である瀧口さんが母に対してインタビューをするところから始まる。なぜここで土産屋をやっているのか、どういった経緯で父と結婚することになったのか、母の両親はなぜいないのか、と母のユリ子さんは娘からの質問攻めにあっている。その様子はなんだか微笑ましい。ユリ子さんは一つひとつの質問に丁寧に答えていくのだがそこから親戚をはじめとするアイヌの人々、樺太の少数民族ウイльтаの老女など、さまざまなひとから話を聞くようになる。冬の川の様子。サケ漁や狩猟の思い出。夫婦や家族の歴史。特にユリ子さんとその叔父である平夫さんが語る、何とも生き生きとした「密猟」の様子はとても魅力的だった。またアイヌの老女が語る壮絶すぎる夫婦げんかなど、笑い事にははいけないのだろうが、つい笑ってしまう話も随所にある。特に衝撃的だったのが、夫婦げんかで夫に銃口を向けられ妻が逃げ惑う話である。「やきもち焼きなんだ、あの人。」²と笑って話していたが想像するだけで恐ろしい。

場所は変ってサハリン。「網走をもっと田舎にしてみたいなところ」³と思っていたサハリンへの旅で、その多様な世界に触れることが、この本を書くきっかけにもなっている。昔からその土地で暮らしている彼らの語りや、瀧口さんがたどる先祖の足跡から浮かびあがるものは、明治期以降にとられた「同化政策」と戦争がもたらした影となって現れる。アイヌだけではなく、サハリンに住む民族たちにも多大なる影響があったこの同化政策によって彼らは日本語を話し日本式の生活をしなければならなくなった。しかし、完全に日本に染まっていなかった。むしろ民族の言葉や文化風習を決して捨てなかった、という事実も浮かびあがってくる。瀧口さんは、自分が抱える問いとの向き合い方を別の地域の別の人たちとの接触によって知ることができた。

厳しい時代の中で自らの未来を切り開こうとする様子から、アイヌの歴史を語ろうとするとどうにもアイヌ民族全体が一つの方向を見ているかのように単純化してしまいがちだが、そうではないのだと本書の最後で語られていた。アイヌと日本人が一人の人の中に存在しているのは何もおかしいことではない、むしろそのはかることのできない微妙な二つ

の間を認めることが大切なのだ。アイヌの出自を問われるのを億劫に思ってきた瀧口さんが、自らのルーツとアイデンティティーについて真摯に考えた記録がこの本書であるが、最終的にアイヌは滅んだのではなくて生活スタイルを変えながら今がある、そして自分とは自分なのだという結論に至った。長い時間をかけたからそう気づくことができたのかもしれない。「自分とは何者か」「民族とは何か」と瀧口さんが常に問いかけていたものは本書を読むことで、彼女のその一端を知り、感じるができる。読み終え、私が得たものは、ならば私は何者であるのかという私自身に対する問いであった。

¹ 瀧口夕美『民族衣装を着なかったアイヌ 北の女たちから伝えられたこと』（編集グループ<SURE> 2013）、7頁

² 本書 207頁

³ 本書 154頁